

月下独酌

菅

茶

山

酒を把つて  
明月を邀う

杯中金波を作す

豪来頻りに  
吸い尽くす

腹に葬る  
幾端娥

【作者】菅 茶山（二七四〜一八二七年）・江戸中期から末期にかけての儒者・漢詩人。備後（広島県）神辺に生まれた。家は代々儒者で、幼少から書を好み詩を作り、十九歳のとき京都に出て和田東郭について医学を、また市川某について古文辞学を学んだ。のち二十四歳のころ朱子学に転じて、那波魯堂の門に入り西山拙斎・中山子幹・佐々木良斎らと交遊し、帰郷ののち家事を弟に託し私塾「黄葉夕陽村舎」を開いた。福山藩の藩校として認められ「廉塾」と改めた。茶山はその後塾のと青英の仕事に生涯を捧げた。八十歳で没した。

【語釈】\*月下独酌…明月の夜、月を見ながら、ただ一人杯を傾けること。 \*金波…月の光。 \*豪来…気が大きくなること。 \*嫦娥…月の女神。

【通釈】なみなみと注いだ杯を手にとつて折から昇る明月を迎えると、杯の中には、月の光がキラキラと美しく映っている。月を見ながら飲むうち、次第に気が大きくなって盛んに飲んだが、いったい杯の中に入った月の女神を、幾人腹の中に飲み込んでしまったことが。

【鑑賞】一人で飲む酒には心の安らぎがある。茶山は酒も強かつたらしく、この詩には李白顔負けの豪快さがある。